

目 的

那珂川のアユ資源を持続的に活用するためには、漁獲の動向を把握した上で適正な漁場運営を行う必要がある。そこで今年度も引き続き、那珂川におけるアユの漁獲状況に関する情報を収集した。

材料および方法

**友釣りによる漁獲状況** 栃木県那珂川漁業協同組合連合会会員 4 漁協に対し、調査票 150 枚を前年度の賦課金納入者数の割合に応じて配布した。各漁協がそれぞれ選定した調査員に対し、平成 29 年 6 月 1 日の釣り解禁日から 11 月 10 日までの間、釣行日、釣獲地区（本流 7 地区および 4 支流の計 11 区域；図 1）および釣獲尾数（釣果なしも含む）の記録を依頼した。無記入の調査票は、出漁日数を 0 として扱った。なお、回収率は 55.3%であった。

**投網による漁獲状況** 釣りと同様の方法で調査票 50 枚を配布し、漁獲重量の調査を行った（投網は 7 月 10 日から区間毎に順次解禁される）。なお、回収率は 72.0%であった。

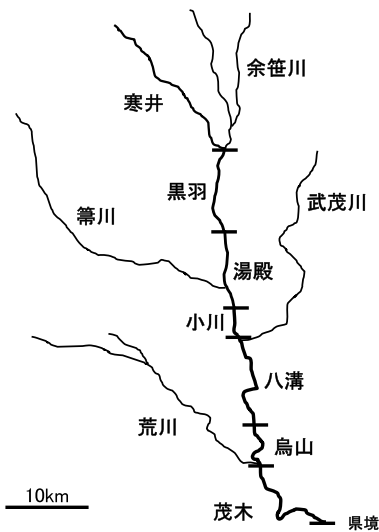


図 1 那珂川における釣獲地区の区分

結果および考察

**釣れ具合・獲れ具合** 釣れ具合は 9.2 尾 / 人 / 日で、前年(10.3 尾 / 人 / 日)および平年(10.0 尾 / 人 / 日)をやや下回った(図 2)。解禁日は 7.8 尾 / 人 / 日(図 3)と平年(9.8 尾 / 人 / 日)を下回った。月別の推移を見ると、漁期前半の 6~7 月は平年より低く、8~9 月はほぼ平年並み、10 月では高かった(図 4)。地区別

に見ると、解禁日には全体的に前年に比べて低く、出漁した調査員も前年の 1/3 と少なく、湯殿、小川、八溝の 3 地区では調査員が出漁せず、烏山では出漁したものの漁獲されなかった(図 3)。漁期を通してみると、余笹川や荒川では前年を上回ったが、全体では前年を下回っていた。特に茂木地区を除く本流で前年からの落ち込みが大きい結果となった(図 5)。

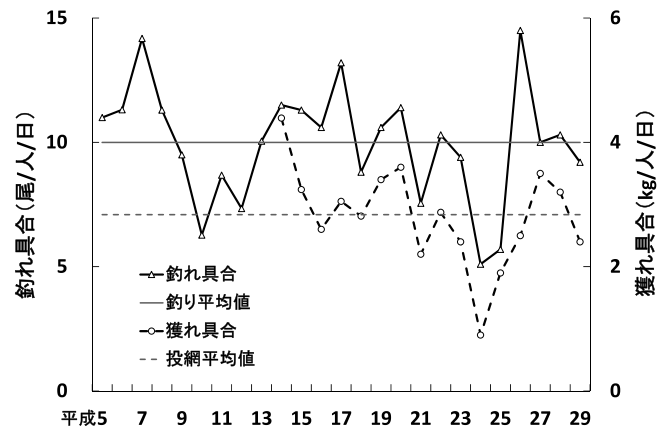


図 2 釣れ具合および獲れ具合の経年変化

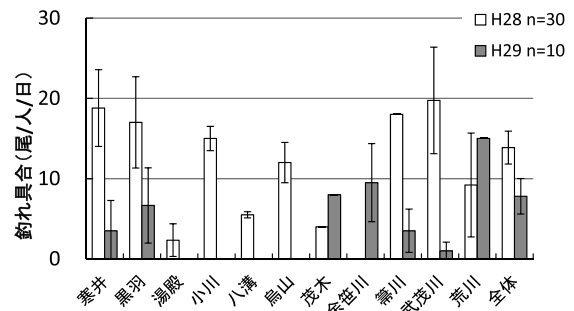


図 3 地区別の釣れ具合（解禁日）

エラーバーは標準偏差を示す。

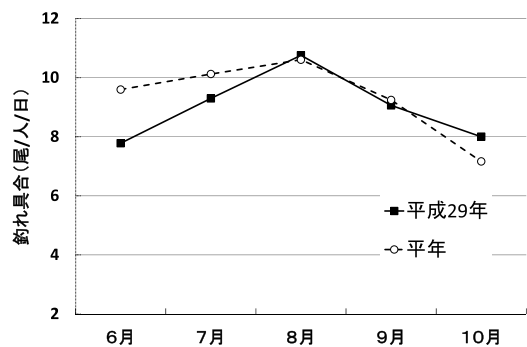


図 4 釣れ具合の月別の推移

投網による獲れ具合は2.4kg/人/日で、前年(3.2kg/人/日)から低下し、平年(2.8kg/人/日)と比べてもやや低かった(図2)。

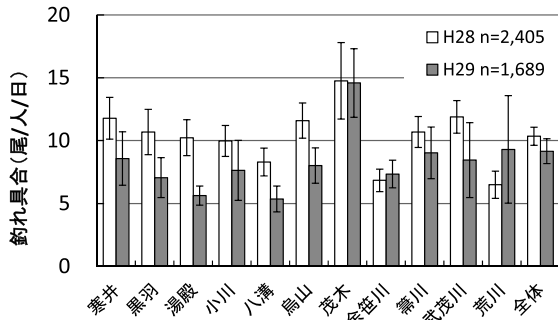


図5 地区別の釣れ具合(漁期全体)  
エラーバーは標準偏差を示す。

**出漁日数** 釣りにおける1人あたり年間の出漁日数は13.8日/人で、前年(19.5日/人)の70.8%、平年(21.0日/人)の65.2%となった(図6)。

一方、投網の出漁日数は11.1日/人で、前年(11.9日/人)から微減したものの、平年並み(11.1日/人)であった(図6)。

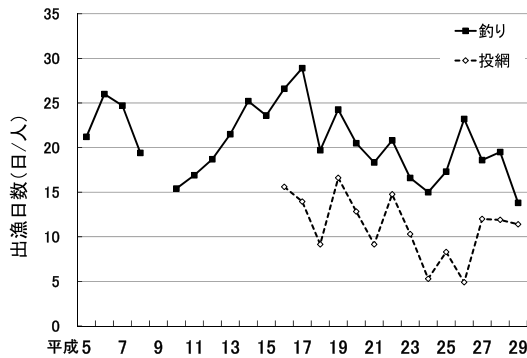


図6 釣りおよび投網の出漁日数の推移

**釣獲尾数・漁獲量** 釣りによる漁獲量は146.1tで前年(142.5t)から微増した(図7)。地区別では、茂木が最も多く、寒井、烏山、余笹川、箒川、荒川の計6地区で前年を上回った(図8)。

投網による漁獲量は52.5tで、前年(66.6t)の79%だった(図7)。地区別では、茂木、荒川で前年を上回った。一方、烏山では大きく減少した(図9)。

**出漁者数** 釣りの出漁者数は13.7万人で前年(20.1万人)の68%に減少した(図10)。

投網の出漁者数は1.9万人で前年(2.1万人)から微減した(図10)。

(指導環境室)

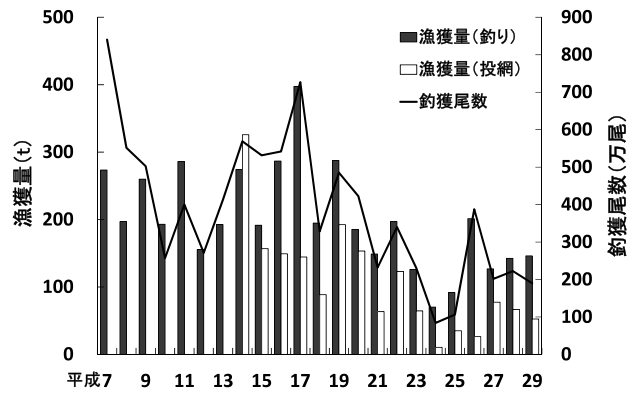


図7 釣りおよび投網による漁獲量および釣獲尾数の経年変化

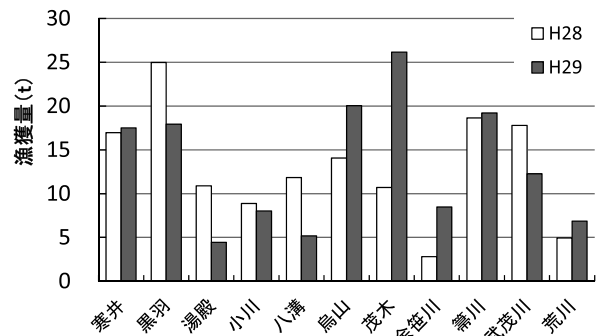


図8 地区別の漁獲量(釣り)

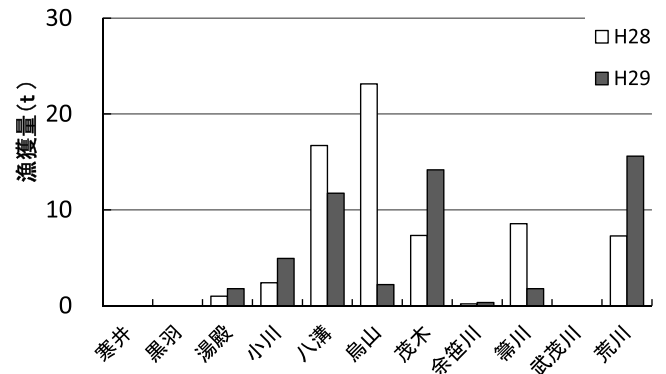


図9 地区別の漁獲量(投網)

※寒井・武茂川地区は釣り専用区

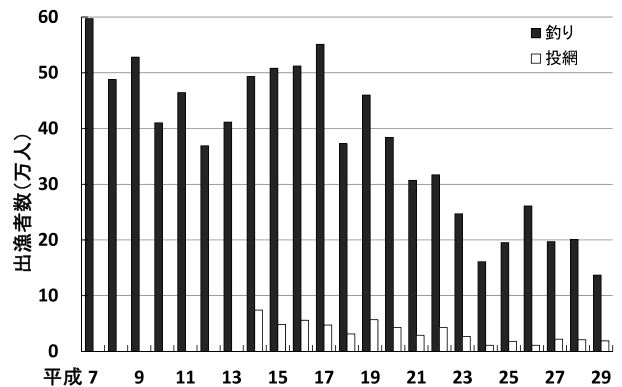


図10 釣りおよび投網出漁者数の推移